

十津川災害(明治 22 年)と吉野郡水災誌

株式会社 防災地理調査 ○今村隆正

国土交通省 国土技術政策総合研究所 内田太郎

独立行政法人 土木研究所 山越隆雄・武澤永純・横山修

株式会社 防災地理調査 彌富涼子

1. はじめに

『明治貳十貳年 吉野郡水災誌』(以下、水災誌という)は、いわゆる「十津川災害」と呼ばれている、明治 22 年(1889)の豪雨災害の状況について詳細にまとめられた大変資料価値の高い貴重な資料である。

本発表は、水災誌を読み解き、成立、構成、内容を分析するとともに、崩壊個数、位置、規模等を、明治 44 年(1911)測図 1/50,000 旧版地形図などを参考として検討した結果を発表するものである。

2. 十津川災害(明治 22 年)の概要

明治 22 年(1889)8 月 18 日から 20 日にかけて、紀伊山地から吉野地方(和歌山県から奈良県南部)を襲った豪雨は、紀伊半島各地で大規模な斜面崩壊を多数発生させた。中でも、十津川村及びその北側に隣接する、天川村、大塔村、野迫川村では、大規模な崩壊(水災誌では縦横 50 間以上の崩壊地を「大崩」と表現している)が 1,128 箇所、堰止湖が 50 箇所発生した。そして当時の人口 20,030 人のうち 240 人の死者を出した。更に、十津川村では 2,667 人が北海道(新十津川村)への移住を余儀なくされた。

(※大崩や人口等の数値は、水災誌に記載された、十津川 6 村、天川村、大塔村、野迫川村の合計値である)

3. 『明治貳十貳年 吉野郡水災誌』

3.1 成立・構成と主な記載内容

水災誌は、宇智吉野郡役所により編纂され、災害から 2 年後の明治 24 年(1891)に全 11 巻として発表された。吉野郡内における災害当時の風雨の状況、山崩れや新湖の形成状況、被害数、視察報告、義捐金、北海道への移住人数等が、大字単位で詳細に記されている。また、それらの構成が、各巻統一した書式で整理されていることは特筆すべき点である。巻之壹の諸言には「後人ヲシテ此編ニ頼リ以テ災状ノ一斑ヲ窺ハシメント欲ス」とあり、後世の人がこの水災誌を読んで当時の災害状況を語り継いで欲しい、と主張されている様にも聞こえる。

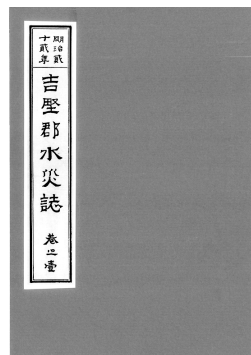


図 1 吉野郡水災誌

3.2 十津川村の変遷

水災誌を読み解く上で、十津川村の変遷を理解することは重要である。現在の十津川村は日本で最も面積の大きい村として有名であるが、災害が発生した明治 22 年(1889)は、地方行政組織の再編により、旧来の 55 箇村が、北十津川村・十津川花園村・中十津川村・西十津川村・南十津川村・東十津川村という 6 箇村に合併したばかりであった。そして、合併直後に発生したこの災害が契機となり、翌年の明治 23 年(1890)には、6 箇村が合併して現在の十津川村となった。

水災誌は、基本的に、災害当時の村毎に一村一巻として編纂され、更に各村で発生した個々の崩壊や被害状況の詳細を、旧来の 55 箇村(大字)毎に取りまとめている。

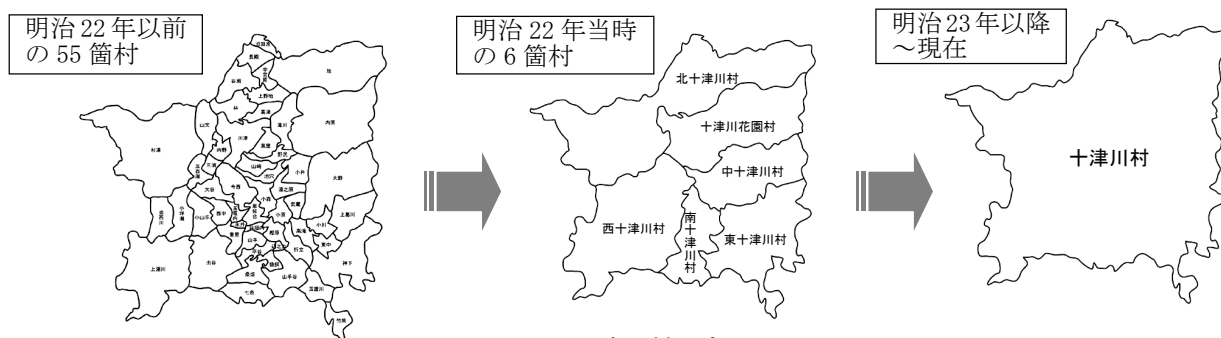


図 2 十津川村の変遷

4. 明治 44 年測図 1/50,000 旧版地形図に示された崩壊地

明治 44 年測図 1/50,000 旧版地形図(以下、明治 44 年図という)には多くの崩壊地が示されており、これらの多くは、明治 22 年に発生した崩壊地であることが既往文献(例えば、千葉, 1975 など)でも指摘されている。

明治 44 年図は、本地域の地形図としては最も古い旧版地形図であり、崩壊状況を知る上では最も科学的かつ客観的な資料である。しかしながら、災害以前から存在していた崩壊地や災害後に発生した崩壊地も含まれている可能性もあり、また、災害から 22 年が経過した時点での測図であることから、紀伊半島の湿潤な気候を考慮すれば、大規模崩壊以外の崩壊地には十分な植生が復活していたことも考えられる。

水災誌に記載された崩壊地(大崩)1,128 箇所に対し、崩壊地の大字・小字・山谷の名称、水災誌における表現、森林基本図等を手掛りとして机上調査を行い、位置の対応を追跡したところ、判明したものは 18/1,128 であった。更に、位置の対応が判明した崩壊地について規模(長さ、最大幅)を比較したところ、長さにおいては 12/17 が、最大幅においては 14/17 が水災誌の記述の方が大きかった(図 4、図 5)。

(※18 箇所の内 1 箇所は規模の記載がないため 17 箇所となっている)

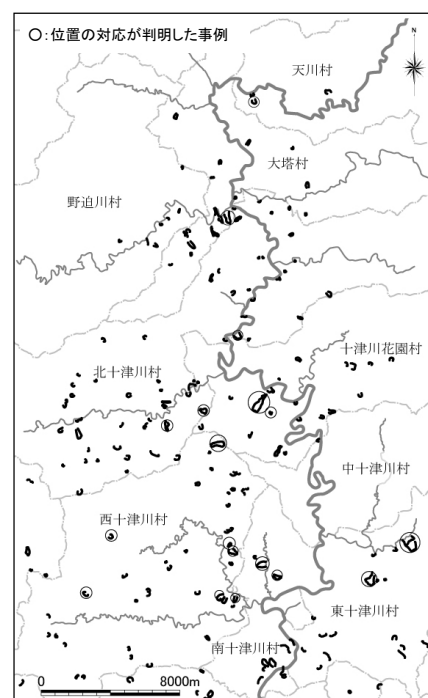


図 3 明治 44 年図に示された主な崩壊地

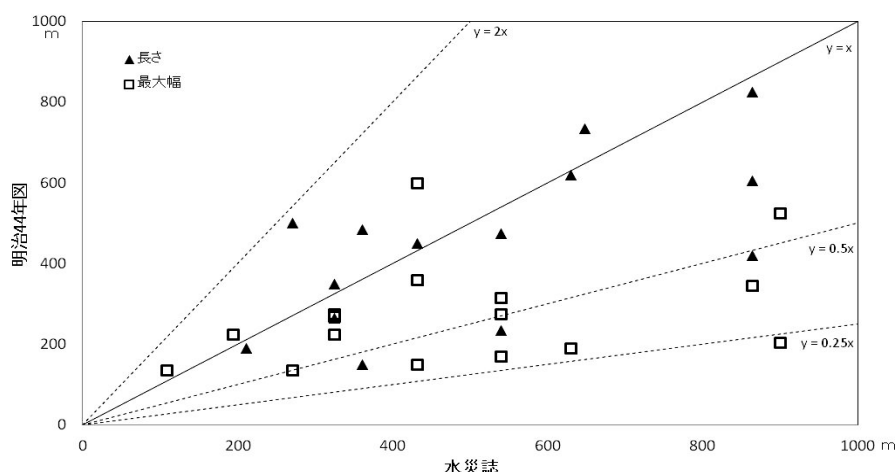


図 4 水災誌と明治 44 年図の崩壊地の規模(長さ、最大幅)の比較

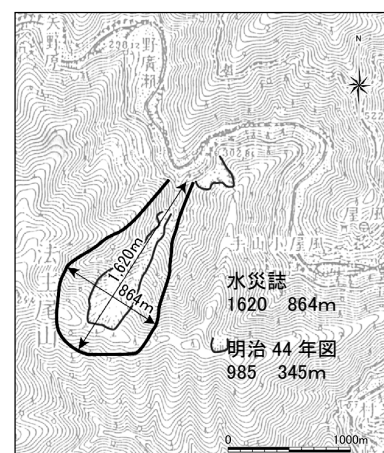


図 5 崩壊規模の比較(野広瀬)

5. さいごに

『明治三十二年 吉野郡水災誌』は、未曾有の大災害の直後であったにもかかわらず、被害情報を詳細に取りまとめられた大変貴重な資料である。本研究において、水災誌に示された斜面崩壊に関するほぼ全ての記載内容を分析するところまでを完了した。しかしながら、個々の崩壊地の位置や規模等、追跡調査をすべき点も多く残されている。水災誌冒頭にも「(崩壊規模等の数値は)目視心考ノ計算スル所ニ従フノミ」と記されており、水災誌に記された貴重なデータを活用していくために、今後とも、地元へのヒアリングや現地調査を継続し、土砂災害状況をより正確に再現していきたいと考えている。

最後に、平成 23 年台風 12 号による被災地域の方々へ心からお見舞いを申し上げます。

参考文献

- 宇智吉野郡役所(1891):『明治二十二年 吉野郡水災誌』巻之一～巻之十一(全 11 巻), 復刻版。
 蒲田文雄・小林芳正(2006): 十津川水害と北海道移住「明治 22 年吉野郡水災誌」は語る, 180p。
 千葉徳爾(1975): 明治 22 年十津川災害における崩壊の特性について(I), 水利科学, 19, 2, 38-54。
 十津川村歴史民俗資料館: 大水災 明治 22 年十津川郷における大水害と北海道移住の記録, 17p。